

視察報告書

報告者 創政クラブ

日 時 : 令和8年7月14日(火) 15:00～
場 所 : 函館市役所、はこだてみらい館・はこだてキッズプラザ
出席者 : 倉田博之・岩垣和彦・片野晶子(創政クラブ)
丸山純平(みんなで未来をつくる会)

視察項目: 「函館市中心市街地活性化事業」について

視察目的: 高山市においても人口減少や少子化への対応、中心市街地の活性化、子育て支援施設の充実が重要な課題となっている。

函館市では、駅前再開発事業の一環として「はこだてみらい館」と「はこだてキッズプラザ」を整備し、中心市街地のにぎわい創出と子育て支援を一体的に推進していることから、その整備経緯や運営手法、利用状況、成果や課題について調査し、高山市の今後の施策の参考とすることを目的として視察を実施した。



1, 函館市の概要と現状

函館市は、長崎市とともに日本でいち早く海外に門戸を開いた港町であり、三方を海に囲まれた歴史ある都市である。開港以来の歴史や西洋文化の影響を受けた街並み、教会群や和洋折衷の建築物などが現在も残り、国内外から多くの観光客が訪れる観光都市となっている。

近年は観光振興に力を入れており、夜景や歴史的景観に加え、映画やドラマのロケ地としても活用され、観光客の増加につながっている。一方で、最大の課題は人口減少である。

- ・昭和55年：約34万5千人（人口ピーク）
- ・最新国勢調査速報：約23万人
- ・約10万人以上減少
- ・毎年約4,000人規模の人口減少が続いており、全国でも減少率が高い自治体となっている。

2, はこだてみらい館・はこだてキッズプラザの概要

(1) 整備経緯

- *施設は平成28年10月、JR函館駅前にある再開発ビル「キラリス函館」の3・4階に開設された。
- *整備の背景には、前市長の公約、北海道新幹線開業を見据えた駅前活性化、老朽化した百貨店跡地の再開発があり、中心市街地活性化基本計画の主要事業として位置付けられた。
- *民間再開発ビルの3・4階部分を市が取得し、公共施設として整備している。

(2) 施設概要

はこだてみらい館（3階）

「デジタル技術・科学・ものづくり」をテーマにした体験型施設。

【特徴】

- ・デジタルコンテンツ
- ・プログラミング体験
- ・3Dプリンタ体験
- ・ワークショップ
- ・函館の歴史・文化をデジタルで体験できる展示
- ・従来型の科学館とは異なり、「最先端技術に触れる体験施設」として整備されている。

はこだてキッズプラザ（4階）

乳幼児から小学生までを対象とした屋内遊戯施設。

【特徴】

- ・大型遊具
- ・親子交流スペース
- ・子育て支援
- ・一時預かり（託児）
- ・全天候型施設

天候に左右されず利用できることから、子育て世代の利用が多い。

(3) 運営方法

＊両施設とも指定管理者制度を導入している。

＊現在は民間事業者によるコンソーシアムが管理運営を行い、イベント・ワークショップ
企画展示などを実施し、利用促進を図っている。

(4) 利用料金・状況

	はこだてみらい館	はこだてキッズプラザ
料金	一般300円（以前は600円であったが、利用促進のため料金改定を実施）	子ども300円 保護者100円
方法	※共通券や定期券も設定されている。	
状況	年間約6～7万人（夏休み・冬休み・修学旅行時期に利用が多い）	年間約4～5万人（雨天時や猛暑日、降雪時など屋内施設として利用が増加）

(5) 成果

視察を通じて、次のような成果が確認できた。

① 中心市街地への集客効果

駅前再開発と公共施設整備を一体的に実施したことで、駅前のにぎわい創出に一定の成果を上げている。

② 子育て支援とまちづくりを両立

単なる子育て施設ではなく、「子育て世代が中心市街地へ訪れる仕組み」として整備されている点が特徴である。近くに他施設との共有パーキングもあり。

③ 全天候型施設としての価値

北海道特有の気候に対応し、雨の日、猛暑日、降雪日でも利用できる施設として高い需要がある。

④ 観光との相乗効果

駅前という立地もあり、観光客からも「こどもが遊べる場所」として利用されており、観光施設としての役割も果たしている。

⑤ デジタル教育への対応

プログラミングや3Dプリンタなど、学校教育では体験しにくい内容を提供しており、デジタル人材育成の一助にもなっている。

(6) 課題

一方で、次のような課題も挙げられた。

① 維持管理費の増加

デジタル機器の更新、遊具更新、ビル大規模修繕など維持費が年々増加している。

② 財政負担

年間運営費約2億3千万円に対し、利用料収入は約3,300万円程度であり、収支率は約14%となっている。今後も財政負担は大きい。

③ 利用者数の伸び悩み

当初想定した利用者数には達しておらず、料金改定などによる利用促進を図っている。

④ 人材確保

こどもと接するスタッフや保育士等の人材確保が課題となっている。

⑤ 今後の施設更新

デジタル設備は更新周期が短く、継続的な設備投資が不可欠である。

(7) 考察

函館市では、単に子育て施設を整備するのではなく、中心市街地活性化と子育て支援、デジタルに触れ将来の人材育成を図る機会を一体的に推進する施設として整備している点が大きな特徴であった。また、駅前再開発に公共施設を導入することで民間再開発を後押しし、駅前のにぎわい創出や観光振興にも寄与していることが確認できた。

一方で、施設整備後はデジタル設備や遊具の更新、ビル修繕など継続的な財政負担が大きく、利用料だけでは維持できない状況であることから、公共施設としての公益性と財政負担のバランスをどのように確保するかが今後の重要な課題であると感じた。

高山市においても、人口減少や子育て支援、中心市街地活性化は共通する課題であり、こど

もや若い世代が集う施設を単独で整備するのではなく、まちづくりや観光、教育、地域活性化と一体的に位置付ける視点が重要であると考える。

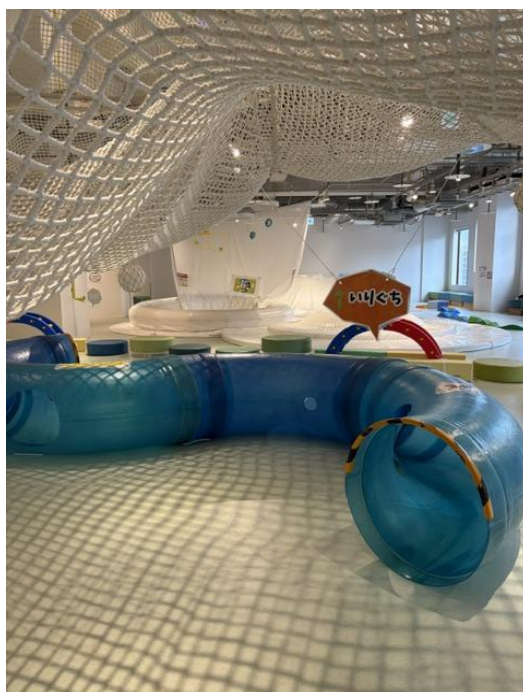
また、施設整備後の維持管理費や設備更新費まで見据えた事業計画を策定するとともに、指定管理者制度の活用や魅力的なイベント・ワークショップの開催など、利用者の視点や立場に立った継続的な利用促進策を講じることが施設の持続可能な運営につながるものとする。

例えば、こどものための遊び場にはその場所に大人と一緒にいく必要があり、子どもの遊び場でありつつも大人自身もその場に行きたくなるような仕掛けや仕組み（カフェの併設や本が読める、離乳食やお弁当の提供）が必要である。また、遊びながら、育児相談ができるような環境づくりなど施設の配置や設置の仕方も具体的な場を想定し、計画・設計・運営をしていくことが重要である。

函館市はデジタルという最新技術を前面に出し、大型遊具を中心とした施設であったが、では高山市はどうあるべきか。高山市の歴史、伝統文化、特色など高山らしさを生かした魅力ある施設にしていくことがこどもの遊び場に留まらない可能性を秘めた場所となり、このまちの発展につながると感じた。



↑メディアウォール（はこだてみらい館）



↑全身を使って遊べる大型遊具（はこだてキッズプラザ）

以上